

こころ育てる絵本との出会い

マクちゃん通信

2010 8 - 9 vol.

3

絵本原画展

やなせたかし

特集

絵本と子育て



やなせたかし

アンパンマン誕生から約40年。
「愛と勇気のヒーロー」は、
世代を超えて愛され、今日も私たちに
夢と希望を与えてくれます。



やなせたかしプロフィール

1919年高知県生まれ。東京高等学芸大学（現・千葉大工学部）卒業。

漫画家を目指しながらデザイナーとして仕事を始め、その後、舞台美術、作詞、放送作家など、さまざまな仕事をする。

1973年絵本『あんぱんまん』を刊行。1988年アンパンマンのテレビアニメ化で人気が発見し、現在に至る。

本職の漫画家、絵本作家の他、詩人、イラストレーター、舞台演出家、舞台美術家などさまざまな顔を持つ。アンパンマンの主題歌や挿入歌の作詞・作曲も手がけている。日本漫画家協会理事長。

©やなせたかし／フレーベル館・TMS・NTV



『アンパンマンと
ホラ・ホラコ』

（フレーベル館）



『ハッピーのだいぼうけん』
（フレーベル館）

原画展示絵本

絵本原画展開催
7月31日（土）～9月29日（水）

本展では、映画化で話題になった『ハッピーのだいぼうけん』

『アンパンマンとホラ・ホラコ』2冊の絵本原画をご紹介します。

やなせたかし先生に インタビュ―



絵本作家になられたきっかけは？

「やさしいライオン」を描いて、偶然それがよく売れたので、いつの間にか絵本作家になっていました。



「やさしいライオン」
(フレーベル館1982年)

画材は何を使っていたらっしゃいますか？

アクリルガッシュです

「アンパンマン」といえば、知らない人がいないほどの人気キャラクターですが、誕生秘話を教えてください。

本当の正義の味方なら、ひもじい人を助けるのが、悪人をやっつけるよりも大切だと思っていたので「アンパンマン」を描きました。アンパンマンは、困っている人に自分の顔を食べさせてあげるんですよ。大人には評判が悪くて「こんな絵本は今の子どもは見向きもしません」と言われたのですが、不思議なことに子どもたちに人気が出て、それも幼児に。それで現在に至っています。

なんのために生まれたか？自分の天職を知ることです。

今回、原画展を行う絵本の制作秘話や思い出を教えてください。

『ハッピーのだいぼうけん』

これは、アンパンマンにあこがれる少年ハッピーの物語で、本当に強いということはどういうことか、「強さとは何？」と問いかけています

『アンパンマンとホラ・ホラコ』

ホラ・ホラコはホラーマンの娘みたいな感じの女の子を作ってみたかった。ホラはつまりウソだからよくないけれど、面白くて楽しいウソもある。メルヘンや童話は本当の話ばかりではありませんよね。

原画展を見に来られる皆さんへメッセージをお願いします。

むつかしい絵はひとつもありません。芸術作品ではなく、わかりやすくきれいに仕上げています。

ご趣味をお聞かせください。

別にありません。趣味と仕事が一緒です。しいて言えば、自分で作った歌を歌うことかな。

好きな言葉を教えてください。

『人生はよろこばせっこ』です。

やなせたかし先生、ありがとうございました！

※表紙「ハッピーのだいぼうけん」(フレーベル館より)

やなせたかし先生のサイン入りの ポスターを3名様にプレゼント！

応募方法 氏名、住所、電話番号をご明記のうえ、ハガキでご応募ください。
あて先 〒939-0283 射水市鳥取50 射水市大島絵本館
「やなせたかしポスタープレゼント係」
締め切り 平成22年9月25日 消印有効

※発表は発送をもって代えさせていただきます。





麦谷 貴子
射水市大島絵本館 主任指導員

特集 / 絵本と子育て

母と子の絵本の時間

「国民読書年によせて」

今年2010年は「国民読書年」。読書への意識を高めようと、各地でシンポジウムなどが開催されています。しかし裏を返せば改善傾向にあるとはいえ、「活字離れ」が国を挙げて取り組まなければならない状況ともいえます。

その一方でネット上ではケータイ小説や電子書籍、ブログ、ツイッターなどが話題を集めています。決して「読むこと」が魅力をなくしたわけではなさそうです。その世界は「ペーパーレス」「手軽」。本がなくても本が読め、時間も空間も選びません。様々な選択肢が増える中、2010年に託された「希望」はどんな形で見えてくるのか5年後、10年後と注目したいと思います。

*

ところで「国民読書年」の事業のひとつに「20歳の20冊」があります。自治体が新成人に本を贈るという事業です。これを聞いて10年前の「子ども読書年」を機に広まった「ブックスタート」を思い出しました。赤ちゃんが生まれた家庭に絵本を配るこの事業は現在、日本の40%もの自治体に普及、子育て世代から「気持ちのこもった事業」と好評です。イギリスに継ぎ、日本は2番目にこの事業を取り入れた国ですが、世界各国にも広がっています。手渡された絵本が親子で絵本を楽しむきっかけとなっていればいいと思います。

私も子育て世代。「聞き手の心をつかめなかった」と反省することも多いお客様への読み聞かせに対し、家庭で娘と読む絵本の時間には充足感があります。読み終わると必ず「もう1回!」と言う期待に満ちた表情が私をそう思わせるのかもしれない。聞き手の心に寄り添って、いっしょに楽しもうという気持ちとはどちらも同じなのに、なぜ娘はこんなに嬉しそうに絵本を見てくれるのだろう。その違いはただ私が聞き手にとって「お母さん」であることだけなのではないか、と感じています。

*

いろいろなことが通じ合う親子だからこそ、絵本の時間はより密度の濃いものとなります。子どもが絵本を読んでもらうとき、必要としているのはテクニクではなく「愛情」。「どんな絵本がよいか」「上手いか下手か」ということよりも、どれだけ自分に気持ちを向けてくれているかです。読み聞かせはひとつの「愛情表現」なのではないかと思っています。

親子が寄り添う絵本の時間、だからこそ守られたぬくもりの中に安らぎと幸せがあふれています。人間が生まれて初めて触れる「活字」でもある絵本。ネットでは実現できないコミュニケーションから「希望」が消えることはありません。

私のおすすめ絵本

『14ひきのあさごはん』

いわむらかずお/作
童心社



文字が少なく、絵をすみずみまで楽しめる絵本はいろんな会話がはずみます。自然がいっぱい描かれていて、清々しい気持ちになれる1冊。

『あっちゃんあがつく たべものあいうえお』

みねよう/原案
さいとうしのぶ/作
リーブル



たべものが表情豊かに動きまわるユニークな絵本、歌って楽しい、見て楽しい、子どもも大人も楽しめる1冊。人気はチョコレートページ。

『ちいさなたまねぎさん』

せなけいこ/作
金の星社



お話の舞台は台所。野菜や食器たちが悪いねずみをこらしめます。ねずみが登場するシーンでは子どもも思わず息をのみます。



『たまねえちゃん。おきやまたし』作
鈴木出版



『こんとあき』林明子/作
福音館書店



『あかたろうの1・2・3の3・4・5』きたやまようこ/作
偕成社



『かぼくんのいちにち』ひろかわさえこ/作
あかね書房



『バムとケロのそらのたび』島田ゆか/作
文芸堂